

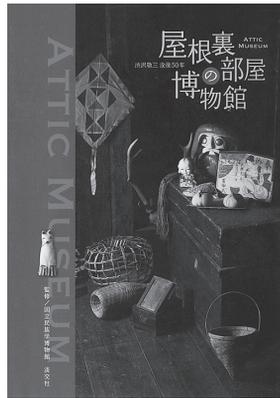
# 5

[書評 | review]

## 国立民族学博物館監修 『渋沢敬三没後50年 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』

National Museum of Ethnology,  
*Shibusawa Keizou Botugo 50 nen Yaneurabeya no Hakubutukan ATTIC MUSEUM*

難波秋音 | Akine Namba



国立民族学博物館(監修)『渋沢敬三没後50年 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』  
淡交社/2013年11月/A4判/215頁/2,762円+税

## 1 — はじめに

渋沢敬三(1896-1963)は、渋沢栄一(1840-1931)の嫡孫で、日本銀行総裁、幣原喜重郎内閣の大蔵大臣を歴任した人物である。それと同時に、庶民生活の調査と博物館建設に尽力し、巨額の私財を投じて数多くの研究者を支援し続けたことでも知られている。

平成25(2013)年は、渋沢敬三没後50年にあたる年である。そこで、渋沢敬三の人物像と業績を総合的に広く世間に知らしめるために敬三に関係する機関や個人が共同し「渋沢敬三記念事業」が立ち上げられた。特別展を主催した国立民族学博物館(みんぱく)は、昭和49(1974)年、敬三の私設の博物館兼研究所・アチックミュージアムの民具[1]と民具研究の思想を受け継ぎ開館した。そうした経緯から、アチックミュージアムをみんぱくの原点と位置付けている。今回「渋沢敬三記念事業」のメンバーとして「財界人・実業家であり、民族学や民俗学、水産史研究など多岐にわたる学問の庇護者として活躍し、日本最初の野外博物館をはじめとする多数の博物館建設に寄与し、自ら民間の研究者としてアチックミュージアムを主宰して研究に励んだ渋沢敬三の功績を回顧するとともに、顕彰するための特別展示を開催する」[2]ことを事業目的とし、「渋沢敬三没後50周年」を冠した特別企画展の実施を進めてきた。その集大成が「特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM」(平成25年9月19日～12月3日)であり、その展示品を収録した本書である。

博物館とアーカイブズは、同じ記憶機関のグループに含まれながらも、収集体制や取り扱う資料(モノ資料と紙資料)、資料のとらえ方(一点と一かたまり)の違いから両者の間に大きな壁があるように評者は感じている。しかし、博

物館もアーカイブズも取り扱う資料の唯一性・歴史性・貴重性が高いという点で共通しているという指摘があるように[3]、博物館とアーカイブズが守るべき資料は本質的に近いものなのかもしれない。特に本書の中心となる民具資料は、収集地や収集者、収集年、用途等のコンテキスト情報なくしてはその価値を測ることが難しい。博物館資料の中でも特にコンテキスト情報が重要視される民具資料は、アーカイブズ資料と共通する点が多いのではないだろうか。そこで、評者は民具資料の調査研究事業において重要視されるものは何かという観点から本書を見ていきたい。

## 2 — 本書の構成

本書は、ごあいさつ、論文(1)、解説(16)・コラム(10)・トピック(15)、各論(2)、そして巻末の渋沢敬三年表と出品目録[4]からなる(( )内の数字は掲載本数を指す)。

特別展の展示内容にあたる部分は解説・コラム・トピックである。特別展は、アチックミュージアム時代、日本民族学会附属民族学博物館時代の二部構成をとり、13のテーマの展示がなされた。解説・コラム・トピックも同様の構成をとるが特別展の13のテーマを資料別に16に分けそれぞれ解説を付している。前半部分は「イントロダクション」、「達磨研究 — 玩具時代の総決算」、「凧」、「オシラサマ」、「男根と性信仰」、「小絵馬」、「きもの」、「アシナカの研究」、「ウケの調査」、「塩籠と『塩俗問答集』」、「背負い運搬具」、「薩南十島調査」の解説からなる。「イントロダクション」では、アチックミュージアムの沿革が紹介されている。以降は特定資料がテーマごとに紹介され、主に用途や地域、形状別に各資料の図版が分類して掲載されている。後半部分は「まなごしの広がり」、「北海道・

樺太」、「台湾」、「朝鮮半島」の解説からなる。「まなごしの広がり」では、日本民族学会附属民族学博物館の設立にともない資料の拡大が図られたことが説明されている。以降は、特定地域で行った調査について紹介しており、その地域で収集された様々な民具の図版が掲載されている。コラムではアチックミュージアムの活動、敬三の民俗学、博物館建設等に関する10のテーマがとりあげられる。トピックは15項目からなり、主に民具資料を一点取り上げ、用途や特徴を図版とともに紹介している。

本書にはそれに加えて、3本の論文が掲載されている。1本目の「渋沢敬三とアチックミュージアム」は特別展及び本書を企画した近藤雅樹氏の筆によるもので、民俗学者・渋沢敬三の人生をアチックミュージアムの活動を通して振り返る。残りの2本は各論として掲載されたものである。2本目「津軽の旅」の教訓——アチック旅行と敬三の思い」は、アチックミュージアムの研究旅行を通して民俗学に必要な視点とは何か考察したものである。3本目「実業家・渋沢敬三——日本銀行時代の横顔」は日本銀行時代の敬三の活躍と彼の「洒落て粋な」人間像を紹介している。

### 3 — アチックミュージアムの変遷

本書の軸となるのがアチックミュージアムの活動である。ここで、「渋沢敬三とアチックミュージアム」(7-22頁)を中心にアチックミュージアムの変遷について紹介したい。

アチックミュージアムとは、大正10(1921)年に敬三が渋沢家厩舎の屋根裏部屋に設立した私設の博物館兼研究所である。彼はそこで鈴木醇、宮本璋、清水正雄、中山正則、田中薫、内山敏ら7人で「アチックミュージアムソサエティー」を組織し、自分たちの干支に

ちなんだ玩具や縁起物類の収集調査・共同研究を始めた。その後すぐに、敬三は横浜正金銀行の社員として海外赴任となったため活動は休眠状態となるが、大正14(1925)年に帰国後、再興された。

玩具研究の背景には当時の郷土玩具収集・研究熱があった。アチックミュージアムの初代管理人・藤木喜久馬は資料整理と郷土玩具収集を担い、全国各地の寺社や縁日の祭礼の場に出向いては収集活動を行った。しかし、期待した結果を得られず昭和5(1930)年頃にはほぼ収束した。

民具研究は昭和4(1929)年頃、敬三が早川孝太郎の奥三河の花祭調査に同行中、地元で生活用具を収集していた夏目一平と出会ったことが契機となった。民具研究では、敬三の発案により同一資料の研究に着手ようになる。アシナカ研究では宮本馨太郎、ウケの研究は大里雄吉、運搬具は磯貝勇らが代表者となって研究が行われた。また、民間習俗にも関心が向けられ、敬三自身、全国各地の塩にまつわる民間伝承を収集した『塩俗問答集』を刊行している。さらに、吉田三郎の『男鹿寒風山麓農民日録』や進藤松司の『安芸三津漁民手記』など、生活者自身がその生活を記録した民俗誌もアチックミュージアムを介して数多く出版された。

昭和7(1932)年には、アチックミュージアムに隣接して水産史研究室が設立された。敬三が療養中の伊豆内浦で地元の網元に伝わる「大川家文書」の調査研究を行うためだった。当時、「浦方文書」の研究は未着手の状態であったことから、國學院大學から祝宮静ら研究員を招きその調査にあたらせた。敬三自身、祖父・栄一の後継者となるまでは生物学者の夢をもっていたこともあり、水産史や生物学には強い関心を寄せていたためであろう。その成果は昭和12年～14年(1937-

1939)に『豆州内浦漁民史料』(全三巻)として刊行され、同15(1940)年、敬三は日本農学賞を受賞した。

解説「薩南十島調査」(136、142頁)によると、同年、アチックミュージアムの最初の大規模の合同調査「薩南十島調査」が行われている。調査を行った年は、薩南十島に定期船が就航した翌年にあたる。この調査では、島の暮らしが変化する前に島々の記録をとり民具を収集することを目的とし「専門を異にする多数の研究者たちとともに、ひとつの地域をトータルに研究すること」が目指された。アチックミュージアムの共同研究の礎となった調査であり、研究対象が庶民生活全般へ向けられ、あらゆる視点から調査を行おうとした姿勢が見うけられる。

昭和14(1939)年、東京・保谷に日本民族学会附属民族学博物館が開館した。コラム4「保谷時代——アチックミュージアムのその後」(76頁)によれば、昭和10(1935)年頃より敬三には博物館建設の構想があり、東京・保谷に土地を購入し、博物館、事務所、研究室を建設した。そして、昭和12(1937)年、それらの施設とアチックミュージアムの収集資料を日本民族学会に寄贈した。さらに、アチックミュージアムの同人を中心とした14名を研究員に任命し、保谷で資料整理や調査研究が行われるようになった。「まなざしの広がり」(145頁)では、博物館でアチックミュージアムの収集資料を核とし、そこに海外で活動を繰り広げた研究者たちが集めた資料も加わったことにより、コレクションが多様化していったことが指摘されている。博物館建設後もアチックミュージアムの活動は継続され、全国各地で収集された資料が保谷に転送された。

昭和17(1942)年、アチックミュージアムは「日本常民文化研究所」と名称を変えた。当時の軍隊や警察らが敵性語に敏感になっ

ていたことがその要因となった。その後、戦況は深刻化し、研究調査事業は中断となる。「イントロダクション」(24頁)によれば、戦後、「財団法人日本常民文化研究所」となり水産資料の研究と出版活動が続けられた。そして昭和57(1982)年、神奈川大学日本常民文化研究所となり現在に至る。

コラム4「保谷時代——アチックミュージアムのその後」(76-77頁)によると、日本民族学会附属民族学博物館は、戦中は疎開教室、戦後は農地改革に奮闘し、昭和24(1949)年までその再開を待たなくてはならなかった。昭和25(1950)年にはアイヌ家屋の建設など野外展示が行われた。しかし昭和36(1961)年、施設の老朽化に伴い閉館することとなる。収集資料は旧文部省資料館に移管され、そしてみんぱくへと受け継がれた。

#### 4 —— 本書の要点

以上、アチックミュージアムの変遷についてまとめた。以下、評者は本書の要点を、①渋沢民俗学、②収集資料の目録化、③民具収集体制の確立、④博物館の構想、⑤収集資料の活用の5点に整理し、紹介したい。

##### 4-1: 渋沢民俗学

本書では、敬三と民俗学者・柳田國男の民俗学の思想の対比がなされている。斉藤純氏の「津軽の旅」の教訓——アチック旅行と敬三の思い」(182-189頁)では、二人の民俗学の視点の違いについて、敬三が「今そこにあるものとして詳細に記述する」のに対し、柳田は対象を「過去との対比でとらえる」と指摘している。また、コラム3「渋沢敬三と柳田國男」(74-75頁)では両者の学問の対比を以下の4点にまとめている。

まず、敬三の主な研究対象が漁民・漁村

であったことに対し、柳田は農民・農村であった点。次に敬三の関心が有形・物質文化である「民具」にあったことに対し、柳田は精神文化・心意伝承にあった点。そして敬三が文字・非文字に関わらず原資料を重視したのに対し、柳田は口承伝承・民俗語彙を重視した点。最後に、敬三が共同研究・共同作業を推進したのに対し、柳田は柳田個人による解説を行った点である。

原資料重視と共同研究推進の背景には、使用の痕跡といった原資料そのものが持つ価値とより多くの視点から研究を行う共同研究の有効性があったのではないだろうか。

#### 4-2: 収集資料の目録化

解説「達磨研究——玩具時代の総決算」(30-31頁)では、達磨研究を中心とした玩具研究の調査・収集・分析の成果を示した『郷土玩具目録』や「郷土玩具縁喜物分布図」、「関東達磨市分布図」を紹介している。『郷土玩具目録』は、加除式の用紙をバインダーで綴じたもので、地域別に四冊に分けられている。採集地・番号・名称・素材・備考の五項目を記すようになっている。番号は既に作成されていた『おもちゃ箱原簿』の番号と一致しており、採集地には製作者に関する情報も記載されている。さらに備考には玩具の解説が記されたという。記載の順序や記入者も不明であり、作成途上の目録であったと推定されるが、既存の原簿と照合できる目録が作成されていたことは興味深い。また、本書巻末の出品目録には、玩具資料・民具資料ともに収集者や収集年が記載されている。これは「収集に際しては、年月日・場所・名称以外にも詳しく記載する。会はレッテルを制定し、寄贈者・収集者などの諸事項を明記」(「渋沢敬三とアチックミュージアム」14頁)というアチックミュージアムの要綱に基づき、収集資料情報の記

録が行われてきたためであろう。

収集資料の目録化は、共同研究を進めていく上で重要な情報共有のツールとなるだけでなく、今日においても私たちに資料情報を伝える重要な役割を担っている。

#### 4-3: 収集体制の拡大

コラム7「民具収集体制の確立を目指して——旧八基村収集資料と「民具蒐集調査要目」」(98-101頁)は、内田幸彦氏により昭和4年—12年(1929-1937)にかけて4回の収集が行われた旧八基村資料を例に、アチックミュージアムでの資料収集体制の拡大の動きについて紹介されている。旧八基村資料は衣食住や生業、儀礼等多岐にわたる資料からなる。その中でも昭和9(1934)年には八基村青年団血洗島支部が農具等生活全般にわたる資料を37件42点収集しており、これらの資料が昭和5(1930)年に出版された『蒐集物目安』の収集物の範囲に収まるという。青年団の収集活動の翌々年、昭和11(1936)年に出版された『民具蒐集調査要目』では、参照した誰もが「民具」収集を行えるように収集対象の範囲や分類が明確に示されている。収集対象は、衣食住に関するものや生業に関するものなどの6つの大項目(一部にはさらに中項目)を設け、さらに具体的な民具名が例示されている。一部にはイラストが添えられたという。このことから、青年団の収集活動は非専門家である地域の住民による収集を目指した『民具蒐集調査要目』との関連があるのではないかと内田氏は指摘している。さらに『民具蒐集調査要目』は昭和29(1954)年の文化財保護法改正時に誕生した「重要民俗資料指定基準」における「文化庁分類」に引き継がれ、全国博物館の民俗資料の収集・整理・展示の指針となった。これらの経緯から、内田氏は「市町村のような

限られた地域において、生活全般にわたる民具資料を広く収集するという、今日の民俗資料収集のもっとも一般的な方法は、八基村資料からはじまった」可能性を指摘している。

#### 4-4：博物館の構想

「敬三の学問に対する考え方は、当時として型破りだった部分がある。しかし、資料・史料に忠実であるべきことの重大さを敬三は知悉していた。だからこそ博物館を研究基盤として位置付けたのである。現地における収集調査により得られた資料を標本として保存公開することにより、誰にでも平等な研究機会を与えることが可能な施設が博物館だからである。敬三の博物館に対する思いの深さは、ひとかたならぬものであった。」（「渋沢敬三とアチックミュージアム」18-19頁）とあるように、敬三にとって博物館とは資料・史料の研究場として大きな意味を持つものだった。公共の博物館である日本民族学会附属民族学博物館の設立に私財を投じたこと、そして戦前戦後を通して博物館開設の協力を惜しまなかったことは、敬三自身の学問に対する考えが深く関係していたようだ。

敬三には昭和10(1935)年頃より「日本各地および周囲民族の住家・野外建造物を含む一大民族学博物館の構想」(76頁)があった。敬三の構想を今和次郎が描いた全体計画には大型民家を含め50棟近い建物が配置されていた。コラム10「アイヌ家屋の野外展示」(158-159頁)によると、昭和25(1950)年、博物館にアイヌ家屋(チセ)が建設され、その際に新築祝いの儀式「チセノミ」が行われたという。様々な地域・周囲民族の住家や野外建造物を作ることは、アチックミュージアムが収集してきたあらゆる地域の生活の記録を再現する意図があったのだろう。近頃、北海道・白老では平成32(2020)年に「国立アイ

ヌ文化博物館(仮称)」が建設されることが決定した。「国立アイヌ文化博物館(仮称)」は野外博物館のかたちをとり、伝統・交流機能として伝統家屋の活用が予定されている[5]。このことから敬三の野外博物館構想は、現在の博物館構想にも通じるものを感じさせる。資料とそれらが使用されていた場を再現することで、より客観的・総合的な研究を行う狙いがあったのかもしれない。

#### 4-5：収集資料の活用

アチックミュージアムで行われた特定地域調査は、特定地域のあらゆる民具を対象に行ったものである。対象地域は日本の統治や近代化によって生活が大きく変化しつつある土地であった点が共通している。昭和10(1935)年代に行われた「北海道・樺太」、「台湾」、「朝鮮半島」地域の生活資料調査では収集された民具も既に使用されなくなりつつあったものが多く、現在失われてしまった当時の暮らしを伝える貴重な資料群となっている。トピック15「過去と現在をつなぐ資料」(157頁)と解説「台湾」(168頁)では、「北海道・樺太」調査で収集されたアイヌ資料と「台湾」で収集された先住民族資料が現在、伝統技術の復興の貴重な資料として活用されている例を紹介している。さらに、アイヌ資料に関して言えば、先述したチセの建設において建設過程の記録、「チセノミ」の調査記録、さらに建築材料の一部が資料として残されている。当時、北海道では既に伝統的なチセが造られていなかったことからこれらの資料も現在大変貴重な資料となっている。

解説「朝鮮半島」(170-181頁)では、朝鮮半島の蔚山・達里で収集された蔚山コレクションについて紹介している。蔚山コレクションは、昭和62(1987)年にみんぱくで外来研究員を務めたソウル大学の李文雄教授(当

時)によってその価値が再発見され、韓国国立民俗博物館による集中調査が行われた。その成果は『郷愁 1936年蔚山達幸——日本国立民族学博物館所蔵集』として公刊された。さらに、平成21(2009)年にはみんぱく、韓国国立民俗学博物館、蔚山市が協定を結び蔚山博物館の特別展「75年ぶりの帰郷、1936年蔚山達里」が開催された。現在はほとんど残されていない朝鮮戦争以前の人々の生活を伝える資料であり、蔚山コレクションの中には当時では珍しい映像記録も残されている。

## 5 —— 終わりに

本書からは、渋沢敬三が原資料を重視し共同研究を推進していたこと、アチックミュージアム設立当初より誰もが資料情報を共有できるように収集資料の目録化を図っていたこと、現在の「文化庁分類」に影響する民具

収集体制を確立していたこと、敬三自身が野外博物館を収集資料の客観的・総合的な研究基盤と位置付けていたこと、収集資料が現在大変貴重な資料として各地で活用されていること、以上5つの要点を読み取ることが出来た。

アチックミュージアムの民具資料の調査研究事業における原資料重視、収集資料の目録化の背景として、敬三自身が博物館を資料の研究基盤と位置づけていたことがあげられる。しかし、目録化におけるコンテキスト情報の付与は、共同研究を据えた情報共有のツールに先立って、民具資料そのものの価値を守る意図があったと思われる。原資料及びコンテキスト情報の重視は、資料そのものの価値を守る意図があり、アーカイブズ資料においても同じではないだろうか。本書はアーカイブズ学の専門書ではない。しかし民具資料とアーカイブズ資料の共通性について考える上で有意義な一冊となっている。

1 —— 渋沢敬三は、日常生活をささえてきた庶民の生活資料を「民具」と命名した。昭和11(1936)年に刊行された『民具蒐集調査要目』の前書きでは、「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身邊卑近の道具——私共が民具と呼んでいる」と民具を定義する。(国立民族学博物館監修、『渋沢恵三没後50年屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』、淡交社、2013年3頁、99頁)。

2 —— 渋沢敬三記念事業、「渋沢敬三記念事業について」、渋沢敬三アーカイブ——生涯、著作、資料——渋沢敬三記念事業公式サイト、<http://shibusawakeizo.jp/project/>、2015年9月21日参照。

3 —— 日本図書館情報学会研究委員会、『シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.10 図書館・博物館・文書館の連携』、勉誠出版、2010年、65頁。

4 —— 本書の凡例では、「掲載する標本資料の写真には、みんぱくで収蔵管理にもちいられる「標本資料詳細情報データベース」に従って資料名・収集地・資料番号を付し、巻末の「出品目録」で参照できるようにした。」と記載されているが、みんぱくに問い合わせをしたところ、ここでいう「標本資料詳細情報データベース」とは館内で収蔵管理専用に使われるものであり、本書に掲載される資料の中には、みんぱくホームページ上の「標本資料詳細データベース」にはまだ登録されていない資料も含まれている。これら未登録資料に関しては、同ホームページ上の「標本資料目録データベース」にて検索可能なものがある。

5 —— 「アイヌ民族博物館」ホームページ、<http://www.ainu-museum.or.jp/index.html>、2015年12月9日参照。